

# 山本北垣内遺跡

——宝塚山本西団地建設事業に伴う埋蔵文化財確認調査報告——

1998.3

兵庫県教育委員会

# 山本北垣内遺跡

— 宝塚山本西団地建設事業に伴う埋蔵文化財確認調査報告 —

1998.3

兵庫県教育委員会



3・4 トレンチ全景



SD 04 全景

## 例　　言

1. 本書は、兵庫県教育委員会が実施した宝塚市山本西2丁目20-7他所在の宝塚山本西団地建設事業に伴う埋蔵文化財確認調査報告書である。
2. 調査は、平成7・8年度に兵庫県教育委員会が調査主体となり、国庫補助事業として実施した。
3. 宝塚山本西団地建設事業は復興住宅建設を行う事業であることから、復興調査の一環として復興調査班が担当した。平成7年度は山本　誠が、平成8年度は渡辺　昇・藤井　整が担当した。
4. 本書で示す標高値は、兵庫県住宅供給公社設定のB、M、を使用した。方位は磁北である。
5. 整理作業は、平成9年度に兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所で実施した。
6. 執筆は本文目次のとおりで、編集は渡辺が担当した。
7. 本報告にかかる遺物・スライドなどの資料は、兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所（神戸市兵庫区荒田町2丁目1番5号）ならびに兵庫県教育委員会魚住分館（明石市魚住町清水立合池の下630-1）に保管している。



図1　宝塚市の位置

# 本文目次

## 例 言

### I. はじめに

1. 調査に至る経緯 .....	山本 .....	1
2. 平成 7 年度の確認調査経過 .....	山本 .....	1
3. 平成 8 年度の確認調査経過 .....	渡辺 .....	2
4. 整理作業の経過 .....	渡辺 .....	3

II. 位置と環境 .....	渡辺 .....	4
-----------------	----------	---

### III. 調査結果

1. 平成 7 年度確認調査の結果 .....	山本 .....	8
2. 平成 8 年度確認調査の結果 .....	渡辺 .....	8

IV. 出土遺物 .....	渡辺 .....	24
----------------	----------	----

V. おわりに .....	渡辺 .....	31
---------------	----------	----

## 表 目 次

表1 出土遺物観察表 ..... 28・29・30

## 挿 図 目 次

図1 宝塚市の位置	i
図2 調査風景	1
図3 調査風景	2
図4 調査地遠景	3
図5 万籾山古墳	4
図6 山本北垣内遺跡の位置と周辺の遺跡	5
図7 長尾山古墳群	8
図8 確認調査トレンチ配置図	9
図9 確認調査土層断面図	9
図10 トレンチ配置図	10
図11 1トレンチ平面図	11
図12 調査地からみた長尾山丘陵	11
図13 1トレンチ北壁土層断面図	12
図14 1トレンチSK01実測図	13
図15 2トレンチ実測図	14
図16 3トレンチ北壁土層断面図	15
図17 3～5トレンチ平面図	16
図18 4トレンチSB01実測図	17
図19 4トレンチSK03・SK04実測図	18
図20 調査風景	19
図21 6トレンチ実測図	20
図22 6トレンチSK07実測図	21
図23 6トレンチSB02実測図	22
図24 7トレンチ全景	23
図25 SB01出土遺物実測図	24
図26 SD04出土遺物実測図	24
図27 SK07出土遺物実測図	25
図28 SB01出土遺物実測図	25

図29	包含層出土遺物実測図(1)	26
図30	包含層出土遺物実測図(2)	27
図31	包含層出土遺物実測図(3)	27
図32	包含層出土遺物実測図(4)	27
図33	足湯池と山本北垣内遺跡の関係	32
図34	山本北垣内遺跡の上に建設中のラ・ヴェール宝塚	33

## 図 版 目 次

巻頭カラー（上）3・4トレンチ全景  
 （下）SD04（大溝）全景

- 図版1 山本北垣内遺跡周辺空中写真（国土地理院撮影）
- 図版2（上）調査地遠景
- （下）調査地からみた長尾山丘陵
- 図版3（上）1トレンチ上層全景（東から）
- （中）1トレンチSD01・SK01
- （下）1トレンチSK01（南から）
- 図版4（上）1トレンチSD04（北から）
- （中）1トレンチSD04（西から）
- （下）1トレンチSD04堆積状況
- 図版5（上）2トレンチ全景（東から）
- （下）3・4トレンチ全景（東から）
- 図版6（上）4トレンチ全景（西から）
- （下）4トレンチSB01周辺（西から）
- 図版7（上）4トレンチSB01（南から）
- （下）4トレンチSB01柱穴断ち割り状況
- 図版8（上）3・4トレンチ東側拡張区とSD04（北から）
- （下）SD04（北から）
- 図版9（上）SD04北壁
- （下）SD04南壁
- 図版10（上）SD04砂疊層堆積状況（北から）
- （下左）SD04上面瓦器出土状態
- （下右）SD04上面須恵器出土状態

- 図版11（上） 6 ドレンチ上層全景（東から）  
（下） 6 ドレンチSK07全景（北から）
- 図版12（上） 6 ドレンチ下層全景（西から）  
（下） 6 ドレンチ下層全景（東から）
- 図版13（上） 6 ドレンチSD04北壁  
（下） 6 ドレンチSB02全景（北から）
- 図版14（上） 出土遺物（須恵器）  
（下） 出土遺物（土師器・瓦器）
- 図版15（上） SK07出土遺物  
（下） 包含層 出土遺物
- 図版16 包含層 出土遺物
- 図版17 包含層 出土遺物

# I. はじめに

## 1. 調査に至る経緯

山本北垣内遺跡は、宝塚市山本西2丁目20-7他に所在する遺跡である。1995年1月17日に発生した兵庫県南部地震（阪神・淡路大震災）は、兵庫県下に多くの被害をもたらし、多くの県民が住宅を失った。そのため、兵庫県では震災後の復興計画として、阪神・淡路大震災に伴う復興事業の中心事業として兵庫県都市住宅部住宅建設課・住宅都市整備公団・兵庫県住宅供給公社で復興住宅の計画が進められた。その1つが今回確認調査を実施した兵庫県住宅供給公社によって計画された宝塚山本西団地である。兵庫県住宅供給公社から兵庫県教育委員会に対し、平成7年10月3日付け兵住公第1176号にて埋蔵文化財の調査の依頼により、発掘調査（確認調査）を実施した。

当地は長尾山丘陵の南側山裾に位置し、北側には後期の群集墳である山本西古墳群が築かれている。丘陵裾部分には遺跡が分布している。

## 2. 平成7年度の確認調査経過

調査は平成7年10月5日・6日（2日間）、10月18日～20日（3日間）の計5日間実施した。

前半の2日間では、調査対象の範囲内に $2 \times 1$ mのトレンチを19箇所設定し、重機および人力により掘削し、平面・断面の調査を実施した。

トレンチNo10・18・19の3箇所では遺物包含層を検出し、No19では溝状遺構・柱穴を検出した。この2日間の調査では、遺構や遺物包含層の広がりおよび遺跡の性格が不明であったため、新たにトレンチ（No20・21・22・23）を設定し追加調査を実施した。

後半の3日間では遺構の広がりを把握するため、 $35m \times 2m$ が2箇所、 $15m \times 2m$ が1箇所、 $10m \times 2m$ が1箇所のトレンチを設定し、重機および人力によって掘削し、遺構・遺物の検出に努めた。



図2 調査風景

### 調査の組織

兵庫県教育委員会 埋蔵文化財調査事務所  
調査事務 山本三郎・水口富夫・平田博幸・山本 誠・飯尾彦人  
調査担当 平田博幸・山本 誠（兵庫県）  
調査委託 安西工業株式会社

### 3. 平成8年度の確認調査経過

昨年度の確認調査である程度の遺跡の広がりが明らかとなった。震災後調査の軽減を図るために文化庁策定の基本方針ならびに兵庫県教育委員会策定の適用要領によって調査を実施することとなった。その要項に基づき、開発部分の建物基礎部分の遺跡が損壊を受ける部分を中心に調査対象として調査を実施することとなった。昨年度の確認調査の結果、遺跡範囲となっているところの基礎部分に改めてトレントを設定した。調査は昨年度の20トレント北側に1・2トレントの2本を設定し、22トレント周辺に3～5トレントの3本を設定した。南側では昨年度のトレントも土層観察や遺構面を検出するために、機械掘削によって確認調査面まで掘り下げた。調査面より下層については今回の調査と同様にさらに掘り下げた部分もある。調査は確認調査の成果を元に遺構面直上までを機械によって、その下については人力によって調査を行った。調査終了後、昨年同様埋め戻し作業も行った。10月7日から11月8までの計20日間調査に費やした。

当初、2棟建設される住宅基礎部分で遺跡内の調査をする予定であったが、南棟の北側基礎部分に農業用の水路が残っており、まだ北から南へ流れていることから、調査を実施することはできなかった。そのため、付け替え工事が終了したのちに、調査をすることとなった。そのため、付け替え工事が終了したのちの、1997年1月20日から25日までの実働5日間調査を行った。前回の調査の3トレントの北側に接した部分である。なお、大きな攪乱坑が認められたので、3トレント西側については調査を行っていない。調査の方法は今まで同様で、埋め戻し作業も行った。

### 調査の組織

兵庫県教育委員会 埋蔵文化財調査事務所  
調査事務 山本三郎・稻田 穎・種定淳介・平田博幸・谷山健一  
調査担当 藤井 整（京都府） 渡辺 昇（兵庫県）  
調査委託 安西工業株式会社



図3 調査風景

#### 4. 整理作業の経過

2年度の確認調査の整理作業を行った。平成9年度に兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所で実施した。平成8年度に一部補助金事業の事務所で水洗い・注記・接合復原を行い、平成9年度に実測作業と出土遺物の写真撮影を主に行い、レイアウト・報告書の編集作業を行い、報告書刊行までの作業を実施した。

##### 調査の組織

兵庫県教育委員会 埋蔵文化財調査事務所

調査事務 稲田 純・岡崎正雄・種庭淳介・平田博幸・谷山健一・長濱誠二・中村 弘

調査担当 渡辺 昇

調査参加者

前田陽子・松本 腊・森本貴子・岡崎輝子・宮田麻子・内藤須美子・藤田由美

木村淑子・茨木恵美子・飯田章子・戸 規子・島村順子・竹内泰子・茅原加寿代

白井昌代・山口幸恵・中村正子・宮野正子

##### 調査協力者

坂井秀弥・直宮壹一・小長谷正治

兵庫県住宅供給公社



図4 調査地遠景

## II. 位置と環境

山本北塙内遺跡は、宝塚市山本西2丁目15他に位置する遺跡である。溝査前は山本遺跡と呼んでいたが、調査が進むにつれて遺跡の範囲が確定し、旧山本村の中には多数の遺跡が存在することから、将来の混合を防ぐために、新番表示になる前の旧小字名に大字をつけて山本北塙内遺跡と称することとした。遺跡の広がりは東西と北側は開発用地内で終息しており、南側のみ遺跡が伸びていることが明らかとなっている。

山本北塙内遺跡は、長尾山の南斜面の地形変換線下の扇状地に営まれた遺跡である。長尾山の尾根上には西摂を代表する前方後円墳である万籟山古墳や八州嶺古墳が存在する。長尾山丘陵は、東西約4.2kmの西摂平野を限る丘陵で、大峰山（標高552.4m）を最高峰としている。西側に武庫川・東側に猪名川によって限られている北摂山地の一翼をなしている丘陵である。北側は西谷丘陵を越えて丹波山地までつづいている。有馬層群である長尾山溶岩や玉瀬結晶質凝灰岩などで構成された丘陵である。有馬一高槻構造線が遺跡北側の丘陵南端に通っており、丘陵内には中山断層なども東西に走っている地形である。急傾斜地であることから崩壊の進行した丘陵も多くみられる。

山本北塙内遺跡周辺は古大阪湾周縁に位置していることから、大阪層群が広がっている。その上部には洪水堆積物が広く覆っている。現在の土壤が物語っているように、阪神・淡路大震災を例にだすまでもなく、この地域は断層や急斜面などの制約された地形・地質の特徴から水害時の山津波・土石流・洪水などの災害の原因となり、歴史にも多くの記録が残されている。

周辺の遺跡は数多くみられる。最も古い時代の遺物は加茂遺跡などで出土しているナイフ形石器である。今のところ西摂では火山灰を伴った出土例や遺構は確認されていないが、六甲山麓から長尾山にかけての丘陵部から多く表面採集されたり、調査で出土している。縄文時代早割期の有舌尖頭器や早期にかけての石鏃も出土しているが、好例はしられていない。縄文時代にかけても同様で、出土例は年々増加しているものの、但馬や淡路のような集落調査例はほとんどみられない。僅かに芦屋市山芦屋遺跡や神戸市東灘区岡本北遺跡などがしられているにすぎない。川西市加茂遺跡で縄文時代後期の溝などが調査されている。隣接する豊中市では中期の墓や住居が確認されている。



図5 万籟山古墳

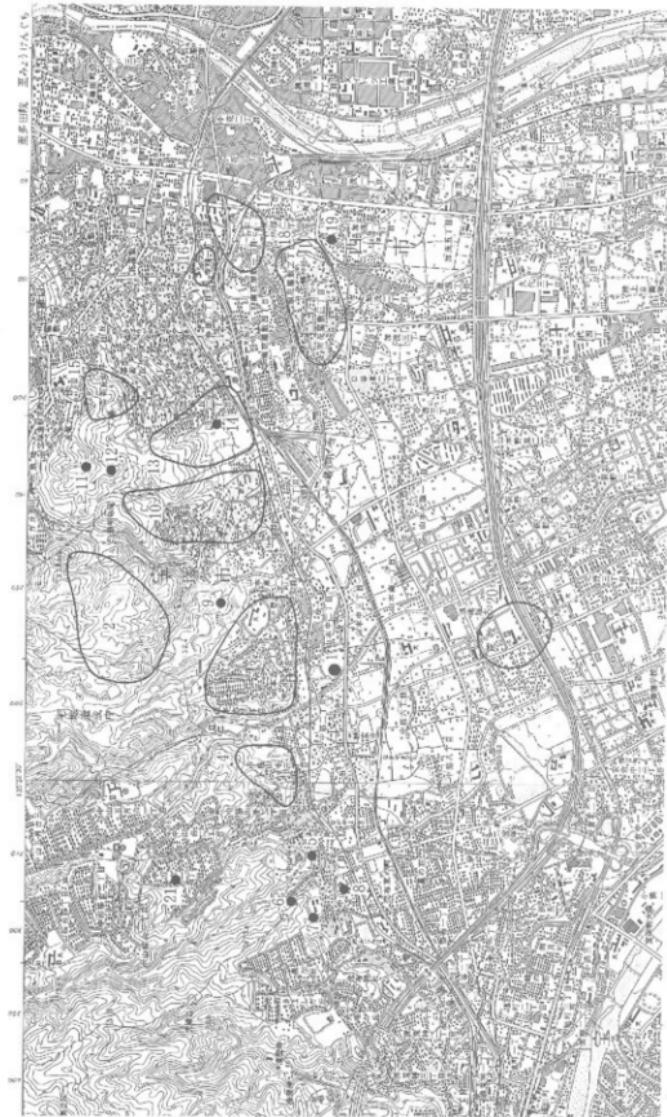


図 6 山本北垣内遺跡の位置と周辺の遺跡

1. 山本北垣内遺跡
2. 山本園古墳群
3. 山木古墳群
4. 中町山手古墳群
5. 白鳥塚古墳
6. 中山御所出土地
7. 中山莊古墳
8. 北米谷廻骨器出土地
9. 長尾山古墳
10. 平井古墳群
11. 八幡山古墳
12. 万葉山古墳
13. 美金山古墳群
14. 平井窯跡
15. 美金山古墳群
16. 小堀遺跡（宋長寺跡）
17. 茅尾遺跡
18. 加茂遺跡
19. 銀御所出土地
20. 高次遺跡
21. 利便川窯跡

弥生時代になると、急激に遺跡は増加してくる。縄文時代晩期には尼崎市から伊丹台地周辺部の低地にかけて多くの生活の痕跡が見られるようになる。伊丹市口酒井遺跡ではこの時期の糸痕の付いた鉢が出土している。また、尼崎市猪名川河床遺跡や田能遺跡で晩期の土器が集中して出土している。弥生時代前期には尼崎市上ノ島遺跡・田能遺跡で米作りを行い定着した集落が営まれ、阪神間全域に広がっていく。加茂遺跡では前期の土器が見られるが、宝塚市では今のところ前期の遺跡はしられていない。中期になると平野西側の五ヶ山遺跡などで集落が増加し、後期へとつづいている。長尾山丘陵でも幾つか出土地点はしられているが、まとまって出土しているのは旧清遺跡だけである。中世寺院の下層から出土したもので、遺構は確認されていない。中期後半から後期にかけての土器がみられる。遺跡は少ないと、興味ある遺跡が2遺跡長尾山丘陵に存在する。ともに青銅器を出土した遺跡で、壳布神社境内遺跡からは銅鏡が、中山遺跡からは銅鏡が2口出土している。中山銅鏡は2個の銅鐸を水平に鈕部分を別方向に向けて置かれていた。2個とも外縁付錠式袈裟樽文銅鐸で同じ範囲で作られた銅鐸である。他に同范銅鐸が2個知られている。今まで古い段階の銅鐸は六甲山麓で多くしられていたが、新たな例として注目されるものである。長尾山丘陵では川西市満願寺銅鏡や栄根銅鏡、箕面市如意谷銅鏡など新しい時期の銅鐸例が知られていただけであった。

古墳時代になると山本北垣内遺跡の北東に位置する万籾山古墳や紀年銘鏡が出土した安倉高塚古墳がよくしられている。安倉高塚古墳は、平地に築かれた径10数mの円墳であろうが、現状では大きく削られている。主体部は竪穴式石室で、鏡（神獣鏡・内行花文鏡）2面と刀・鐵先・玉類が出土している。学会では赤鳥7年の可能性が高いと評価されている紀年銘鏡である。万籾山古墳は西摂平野を一望する眺望の良い尾根上に築かれた西向きの全長54mの前方後円墳で、南北に主軸を持つ竪穴式石室を内部主体としている。最近まで開口しており、畿内で見学できる竪穴式石室としてよく知られていた。全長6.8mで、床面はU字形の粘土床が認められる。木棺は長さ6.2m、幅0.4mである。埴輪と玉類が出土品として残されている。伝世品として石劍5点、鏡2面、琴柱形石製品1点、鐵鏡1点が伝えられている。また、山本北垣内遺跡の北東の丘陵尾根部に立地する長尾山古墳も前中期頃の前方後円墳である。調査されていないが、粘土が露出していることから、粘土壇と考えられている。他に中山寺に舟形石棺の身が手水鉢として残っている。龍山石製で、この時期の古墳が周辺に他にも存在したものと思われる。

また尾根上から山腹にかけて多数の後期から終末期の古墳群が集かれている。総称して長尾山古墳群と呼ばれているが、山本奥支群・山本支群・平井支群・雲雀山西尾根支群・雲雀丘支群など7支群（さ



図7 長尾山古墳群分布図（宝塚市史4巻から）

らに小群に分類されている)に分けられた総数 100基以上の代表的な群集墳である。特に終末期についてはよく論文などで使われており、西浜では最終段階に築かれた古墳群である。墓道の検討などを主に小竪穴式石室や横穴式石室などの主体部の違いなどが論じられている。中筋山手支群では複室構造の石室も見られる。大型の石室は丘陵裾部が多い。突出する規模の古墳は中山寺白鳥塚古墳と川西市の火打山古墳である。白鳥塚古墳は兵庫県で最大規模の横穴式石室で、全長15.2mの両袖式の石室である。巨石で構築され、玄室の幅2.5m、高さ3mを測る。玄室中央奥よりに家形石棺が置かれている。白鳥塚の西側谷には中山莊園古墳が立地している。単独墳で外形が八角形をした特異な終末期古墳である。

古墳群の東端には古墳時代末の須恵器窯跡である平井窯跡が2基存在する。人正3年に報告されたが、現状ではほとんど痕跡を残さない。また、北西の長尾山丘陵の中にも勅使川窯跡が存在した。登り窯が1基で、7世紀末から8世紀にかけて焼成された須恵器窯跡である。壺・蓋・壺・甕・平瓶など各器種が作られている。山本北垣内遺跡出土の須恵器もこの窯跡から供給されたかもしれない。

奈良時代の遺跡は多くはしられていない。中山寺も瓦類の出土はなく、藏骨器や鏡が出土している。北米谷遺跡で石櫃に埋納された藏骨器がある。凝灰岩製で身と蓋から成り、印籠蓋にして重ねている。藏骨器は金銅製で、火葬墓の典型例として貴重である。鏡は平井(八稜鏡)と勅使川(唐式鏡)で各1面出土している。墓に伴う遺物であろうか。奈良時代の集落は宝塚市域では調査例がなかったが、川西市小戸遺跡では郡衙の可能性も指摘されている。都で出土するのと同じ三日月額の土馬が出土しており、鍛冶遺構や黒書土器も多く出土している。

### III. 調査結果

#### 1. 平成7年度確認調査の結果

トレンチNo10・18・19では、厚さ10~20cmの黒色シルトの遺物包含層を検出した。検出した遺物は須恵器・土師器・白磁・黒色土器で平安時代(11~12世紀)のものが中心である。追加調査した4箇所のトレンチのうちNo20~23では溝状遺構を検出した。深さは50cm程度であるが、幅が20m程度のものがあった。その他多くの柱穴も検出された。

No22の溝状遺構内からは円筒埴輪片が多数検出された。出土状況から判断すると原位置を保っていないと考えられる。

以上のように、調査対象範囲の中央部南側付近に遺構・遺物包含層を検出した。検出された遺物から、遺構の時期は古墳時代・奈良時代・平安時代のものである。古墳時代の溝状遺構から出土した円筒埴輪は、川西編年4期(古墳時代5世紀後半)のものと考えられる。これらの円筒埴輪片を多数出土している溝状遺構は、後世に削平を受けた古墳の周溝の可能性が高いと判断された。奈良・平安時代の遺構については、柱穴の検出状況から掘立柱建物が数棟存在していたと予想された。

#### 2. 平成8年度の確認調査結果

昨年度の確認調査で開発対象地内の遺跡の広がりは確認された。その中で、建物基礎にかかる掘削を伴う範囲について、発掘調査を実施した。北棟が1・2トレンチで、南棟が3~6トレンチである。このうち、6トレンチのみ1月に調査を実施した。

北棟と南棟で、多少遺跡の性格が異なっている。SD04は両者で確認されているが、北棟ではそれ以外の奈良~平安時代の遺構は確認されていない。両方ともに上下2面で遺構を検出しているが、時期が異なる。下面是とともに奈良~平安時代であるが、上面は1トレンチ(北棟)は近世で、南棟は中世である。

##### 1トレンチ

5×22mのトレンチで、遺構は2面確認している。上面の遺構は面としては1面で調査しているが、明らかに時期幅がある。遺構は溝と土坑を検出している。溝がさらに新しい時期である。SD01はSK01を切っている。溝はSD01・SD02とともに旧耕作土と思われる土層の下から切り込まれている。ともに礫を詰めており、水田の暗渠と考えられる。

土坑は同一面で調査したが、溝よりは古い遺構である。SK01は小型の井戸かと思われる遺構である。円形に円錐で組んでおり、上面での最大径は0.5mと小型である。掘り方の最大径は1.1mを測る。一般的な井戸と比べると小型であることと粗雑であることが井戸と断定することを躊躇するところである。石材も全体的に小型である。湧水とそれに伴う崩落の危険があることから、底まで掘り下げていない。検出した深さは1.1mである。調査した範囲では遺物は出土しておらず、正確な時期は決定できない。しかし、SD01に切られていることから、それよりは遅るがそれでも近世後半かと思われる。SK02は平面形態は円形に近い不定形で、最大径1.1m・深さ0.3mを測る素掘りの土坑である。遺物は出土していない。

下面の遺構は、大溝であるSD04と土坑1基、ピット数基を検出している。SD04は1トレンチ



図8 確認調査トレンチ配置図

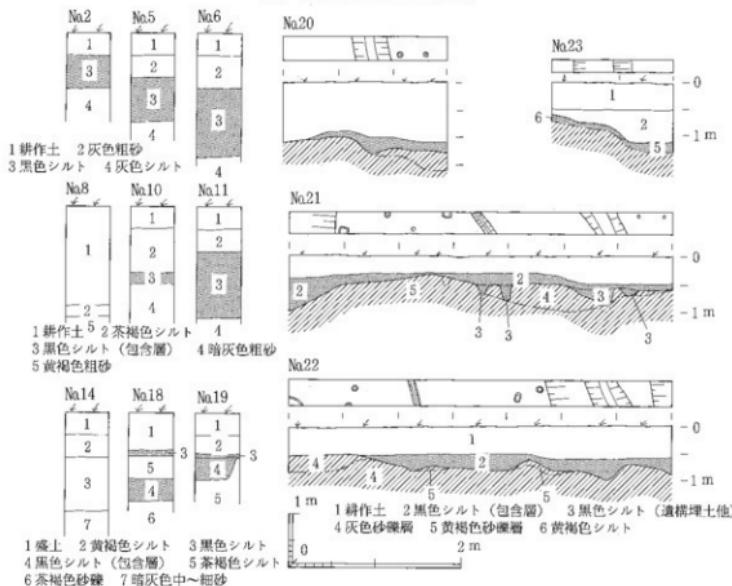
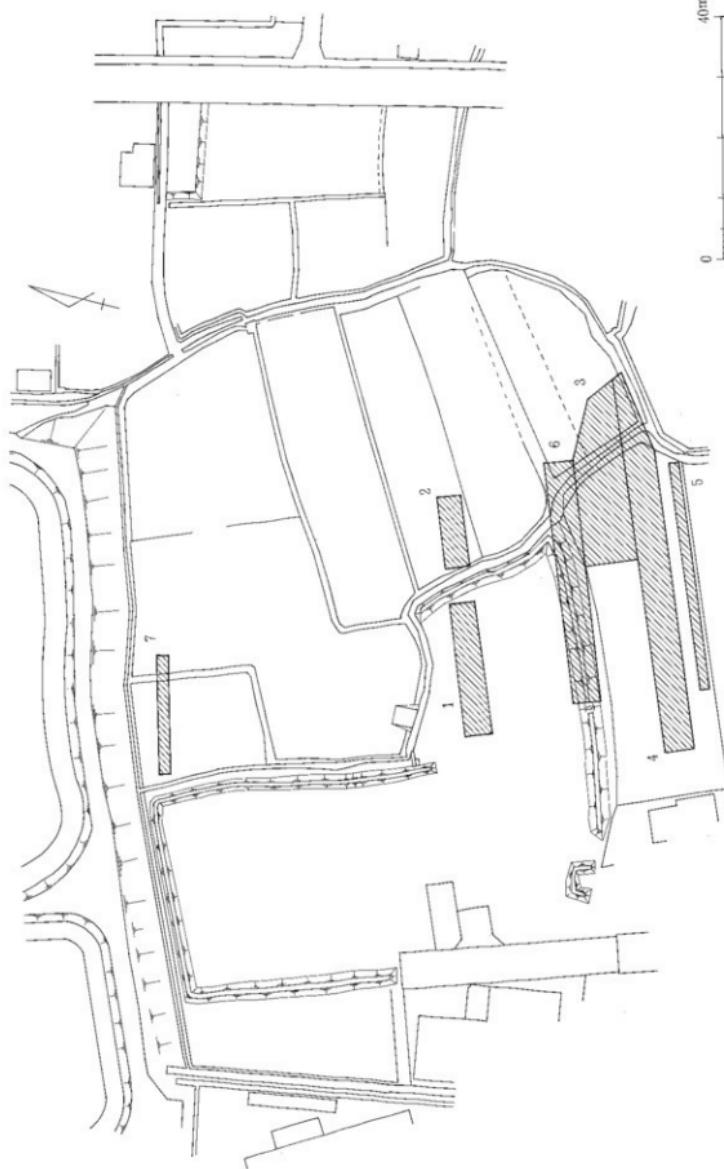


図9 確認調査土層断面図

図10 トレーンチ配図図



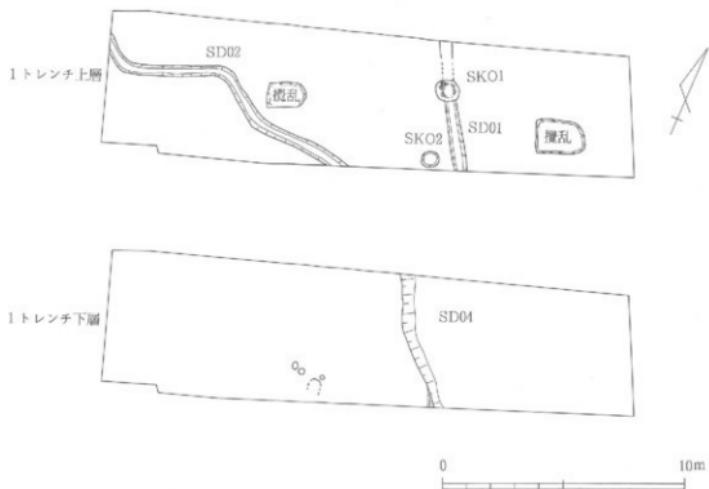


図11 1トレンチ平面図

内では西側の肩部を確認しているだけである。1トレンチの調査段階では大溝になるかどうか確認できなかったが、3トレンチの調査結果から同一の溝であろうと判断した。調査トレンチ内をほぼ南北に走っており、南北どちらにも統一していることが明らかである。南側は3トレンチ（その後の調査の6トレンチ）に繋がっている。調査した幅は9.5mあり、地山では東端でも底が上がる気配は感じられない。3トレンチの結果からいくと、2時期あり、そのうちの古い段階は、調査区内よりさらに広いのか東肩が削平されているかのいずれかであろう。深さは3.9mまで調査している。底と考えているが、明確ではない。新段階の大溝は5.2m前後にならうかと考えられる。出土遺物は古墳時代後期の須恵器から奈良後期～平安時代はじめの遺物が含まれている。ただ、大溝の時期は奈良～平安時代の範囲で新旧があるものと推定される。西側の肩は直角に近い角度で掘り下げられている。



図12 調査地からみた長尾山丘陵

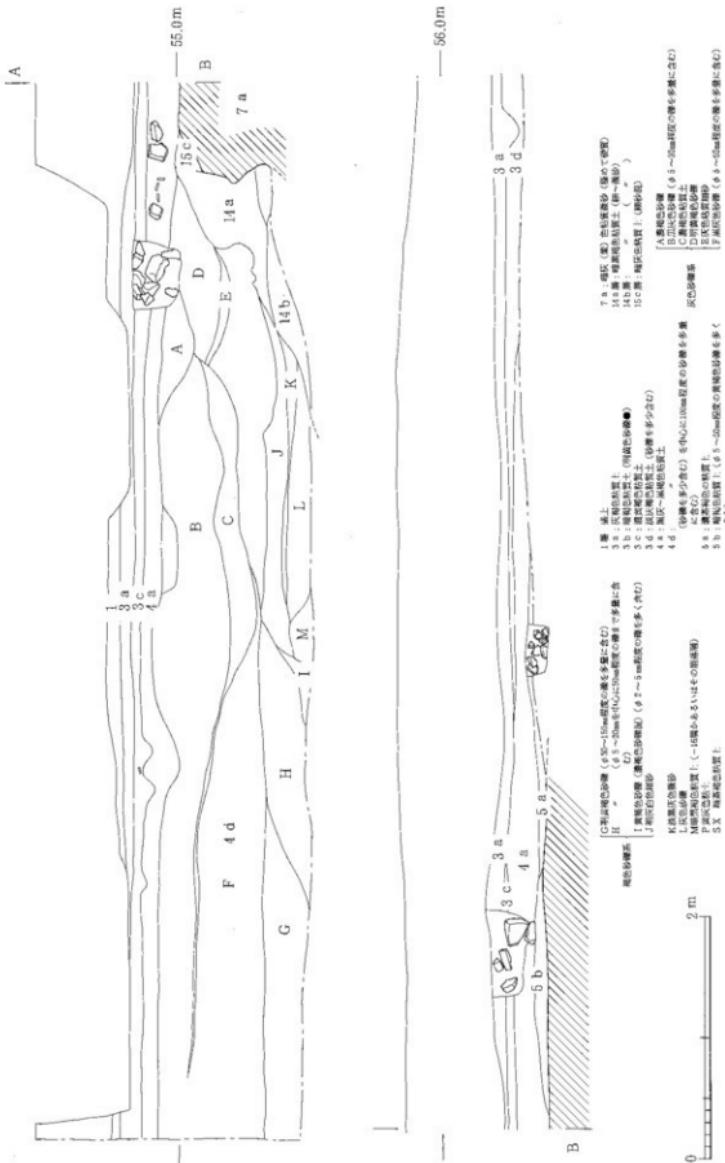
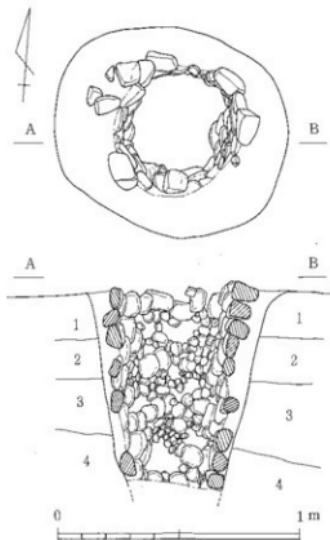


図13-1 ドレンチ北壁土壌断面図



1. 茶褐色砂疊 2. 暗灰色シルト 3. 灰色砂疊 4. 腐層

図14 1トレンチ SK 01 実測図

### 2トレンチ

1トレンチの東側に設定した5×20mのトレンチである。1トレンチと2トレンチの間には、現在も生きている水路があることから、連結して調査することはできなかった。保全を図れる部分を残して調査したものである。黒色のシルト層が広く堆積している。地山面で14基のピットと土坑1基を検出している。ピットはすべて柱痕が確認されないことから、建物にはならないものと思われる。埋土に2種あることから、自然のものと杭の痕跡があるのではと考えている。杭は水田に伴うもので、時期的には中世～近現代までの幅があろうかと思われる。堆積土は自然堆積を思わせる土で、湿地化していたことが明確である。ただ、このなかから数点の弥生土器と石斧が出土していることは注目される。他に瓦器・土師器の小片が出土している。

### 3トレンチ

南棟の基礎部分に設定したトレンチである。当初8×15mのやや台形のトレンチであった。調査段階で用地周囲の擁壁工事と機械室の掘削を伴う施設が東側に接して築かれることがわかったので、水路を東側に切り回してトレンチを30mに延長したものである。北辺は17mの台形の平面形となったトレンチである。

トレンチの北側は確認調査の21トレンチである。トレンチ西半で大溝SD 04を検出している。東側ではピット十数基が確認されているが、明確な掘立柱建物にはならない。

SD 04の東肩は明瞭で垂直に近い急角度で掘り下げられている。一部西側に拡張した結果3トレン

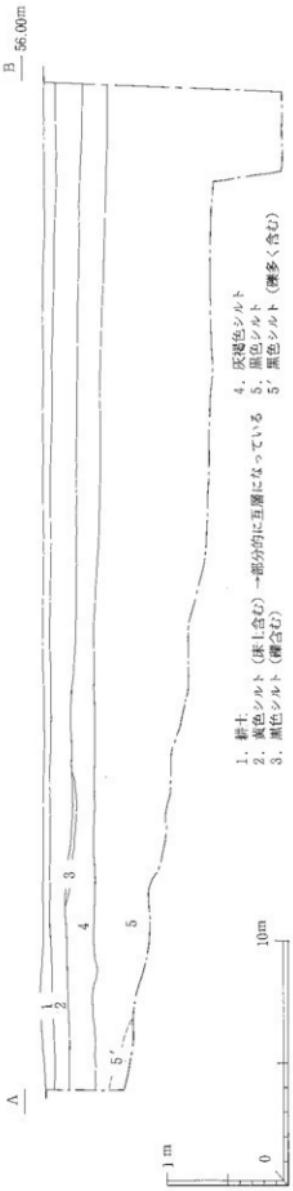
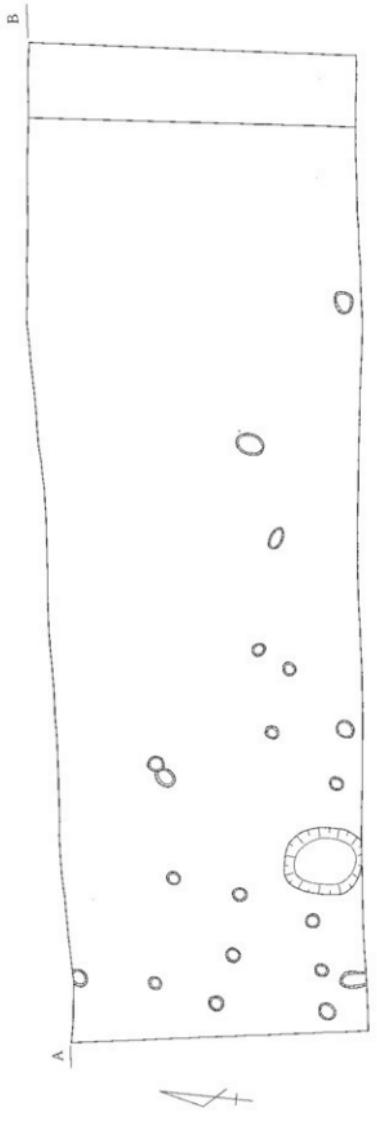


図15 トレンチ実測図

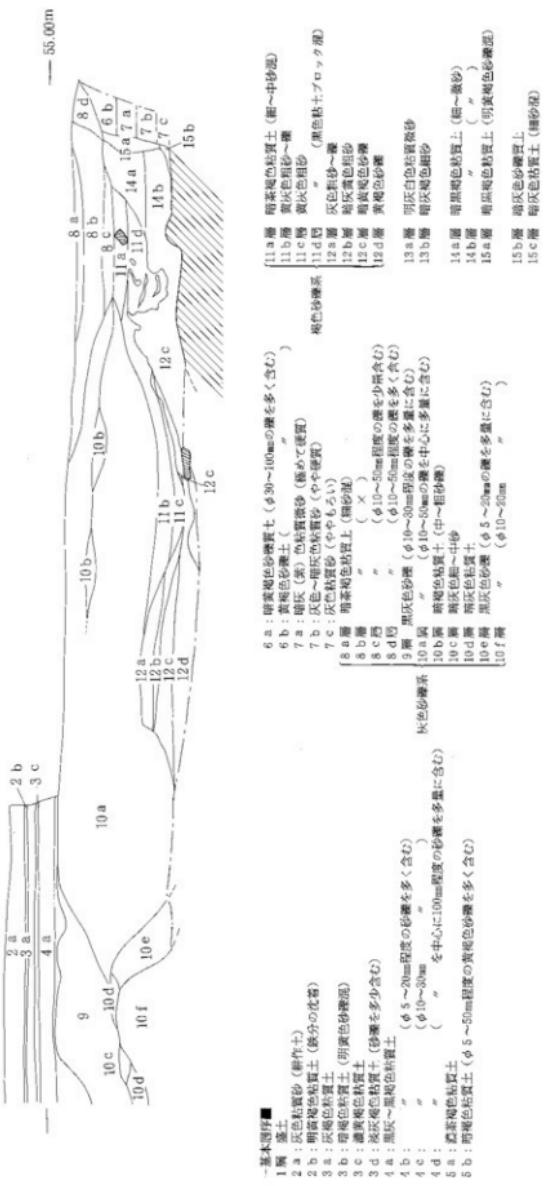


図16 3トレンチ北壁土層断面図

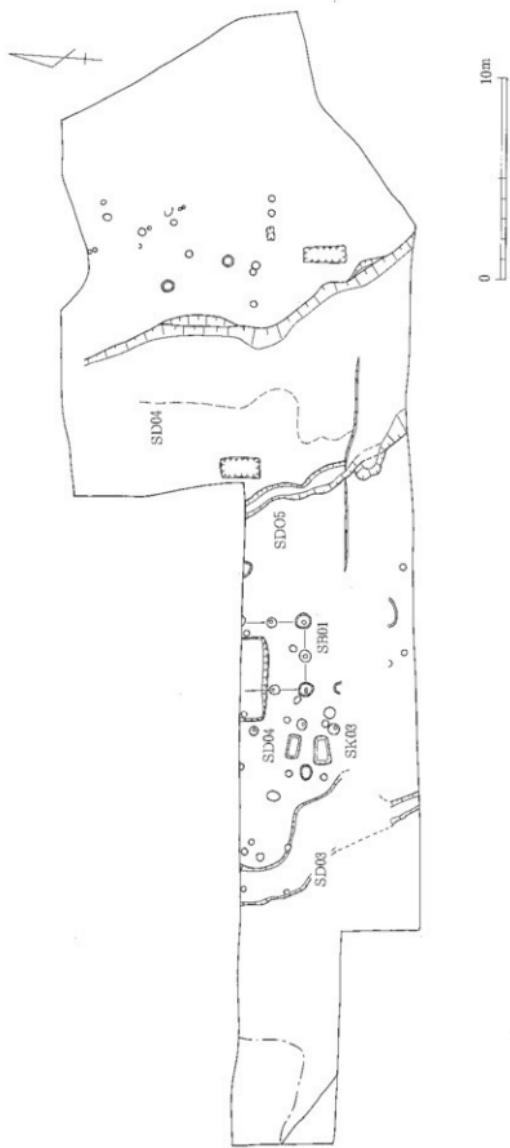
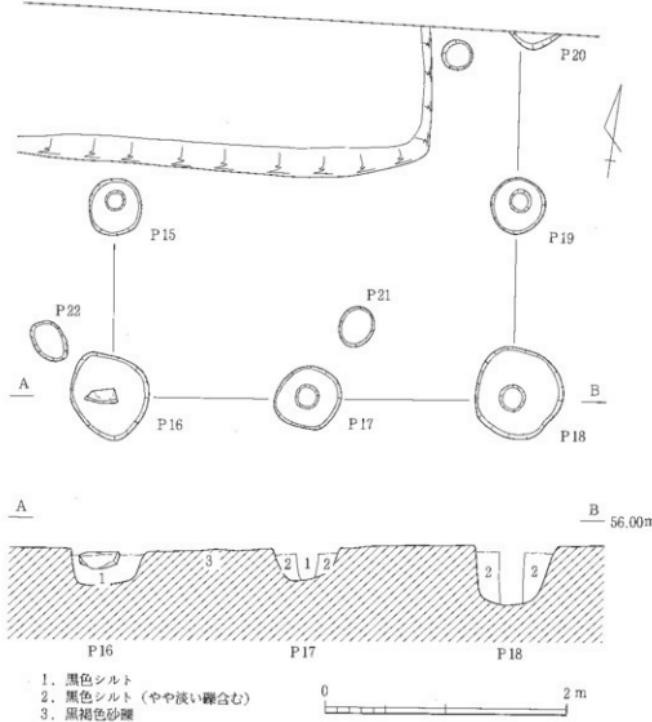


図17 3～5 ドレンチ平面図

チ内では、最大幅10.6m、深さ2.3mを測る大規模な溝である。西肩は後世の洪水により上部は削平されているが、下部は残っており、下端はほぼ確認している。SD04東側では18基のピットを確認している。遺構面から中世の遺物が出土していることから、SD04埋没後に築かれた遺構である。掘立柱建物に復原することはできなかったが、2トレンチのピットと違い、幾つかには柱痕が認められることから、中世の遺構も明らかに築かれていたと思われる。

トレンチ内で東端は遺構が全く認められないことから、遺跡の東限であろうと考えられる。そのため、擁壁工事についても発掘調査をせずに、立会い調査に切り変えた。その後の立会い調査では遺構は確認されず、遺物も近世の土器片が数点確認できただけであった。



#### 4トレンチ

4トレンチは3トレンチの南側に接して設定したトレンチである。3トレンチと同じく調査過程で新たな掘削部分があることが判明したので、東へ延長した。その結果5×45mのトレンチとなった。4トレンチでは面的に2面の遺構が確認されている。ただ、1トレンチのように両遺構面に大きな隔たりがないように思われる。上層の遺構は、SD04の東側では3トレンチ同様に中世の遺構で、SD04の西側では奈良時代末～平安時代のはじめ頃の遺構と考えている。

下層の遺構では、SD04は3トレンチと同じ状況で検出されている。西側は洪水で肩上部が削られしており、その上に上層の遺構である溝SD05が築かれている。下半は明らかに大溝幅は確実である。東肩は残りが良く、急角度で掘り下げられている。溝の最大幅は11.0m、深さ2.6mを測る。底面は平坦やすり鉢状ではなく、局部的に深くなっているところもある。特に肩部近くは水の流れからか、オーバーハングした状態も看取される。平面的には明確に調査で判断できなかつたが、数回の洪水を受けていることは確実である。その際に溝幅を大きく西側から減少させている可能性が高い。最も大きな洪水だけ疊層の範囲が明確である。角礫の混ざった洪水堆積物が北西方向から溝内に入りこんでおり、その際に溝の西肩は大きく損傷したようである。新しい段階は、東肩はそのままで、西側は大洪水によって生じた砂礫層を掘り下げて、改めて幅を小さくした溝を築いている。最大幅で4.5m、深さ1.8mを測る。

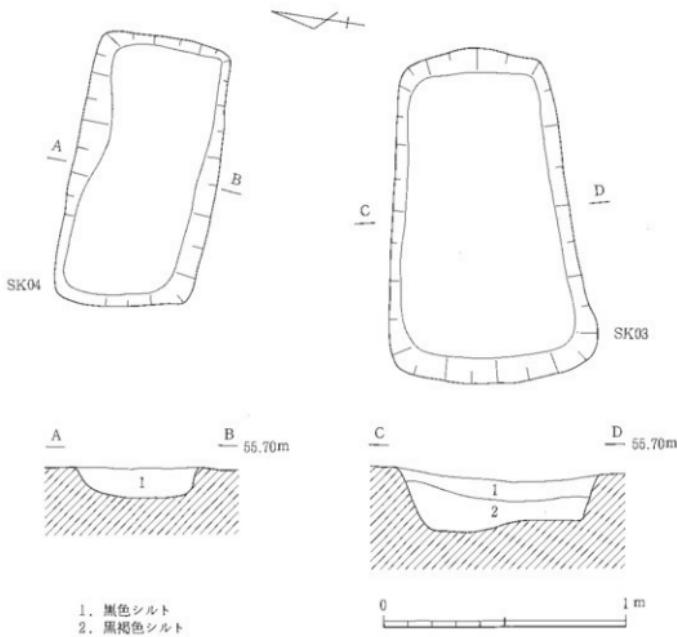


図19 4トレンチ SK03・SK04実測図

遺物は奈良時代後期の遺物に限られている。

上層の遺構は、SD 04の東西で時期が異なっている。東側は3トレンチと同じで瓦器・須恵器が遺構面や遺構内から出土していることから、12世紀の遺構と考えている。内容も3トレンチと同じで遺構の性格は不明である。ただ、SP 24から瓦器碗が5点以上重ねて横向きで出土している。ピット埋土でなく、ほとんど上に出る状態で一部ピットに僅かに入っている状況である。特殊な意味があるものと思われる。また、同時期の遺構としてSD 04が埋まつた後の面で須恵器壺が据え置かれていた。意図的なものであろうと考えている。

SD 04の西側の遺構群は、SD 04と大きな時期の隔たりがない遺構である。一応奈良時代の範囲に入ろうかと思われる。掘立柱建物1棟と溝2条、樋1列、土坑・ピットが検出されている。掘立柱建物は調査区外へ延びている。調査した範囲では2×3間の建物と考えられる。SB 01は主軸をやや西に持つN8°Wにっている。やや大きめの掘り方で、南東隅の柱穴（ピット18）で最大径75cmを測る。柱痕跡は約20cmである。調査区外（北側）へ延びているが総柱ではなく、側柱の建物である。南辺以外の2列には中央部分に柱が確認されていないことから、2×3間（以上）の建物と考えている。平面で調査した柱穴は南西隅（ピット16）以外はすべて柱痕跡を確認している。しかし、ピット16では柱痕跡は認められず、中央部分にやや大きめの角礫（最大径31cm）が存在した。根石かとも思われたが、レベル的に他の柱より高くなることと、柱穴が南東→北西方向にややいびつなっていることから、柱の抜き取りと考えている。本来は同一の方法で柱が建てられたものと思われる。柱間は心々間で東西方向は1.70m、南北方向は1.60mを測る。

### 5 トレンチ

調査区の最も南側に設定したトレンチである。確認調査の22トレンチの南側に隣接して設定した3×40mのトレンチである。当初調査予定に入っていなかったトレンチであるが、用地南側のフェンス撤去工事が計画されたことから、急速調査を行った。調査結果は4トレンチと一体であることからも、同様の成果を得ている。SD 03・SD 04が南側に延びている。ピットも数基検出したが、明確な遺構になるものは調査されなかった。



図20 調査風景

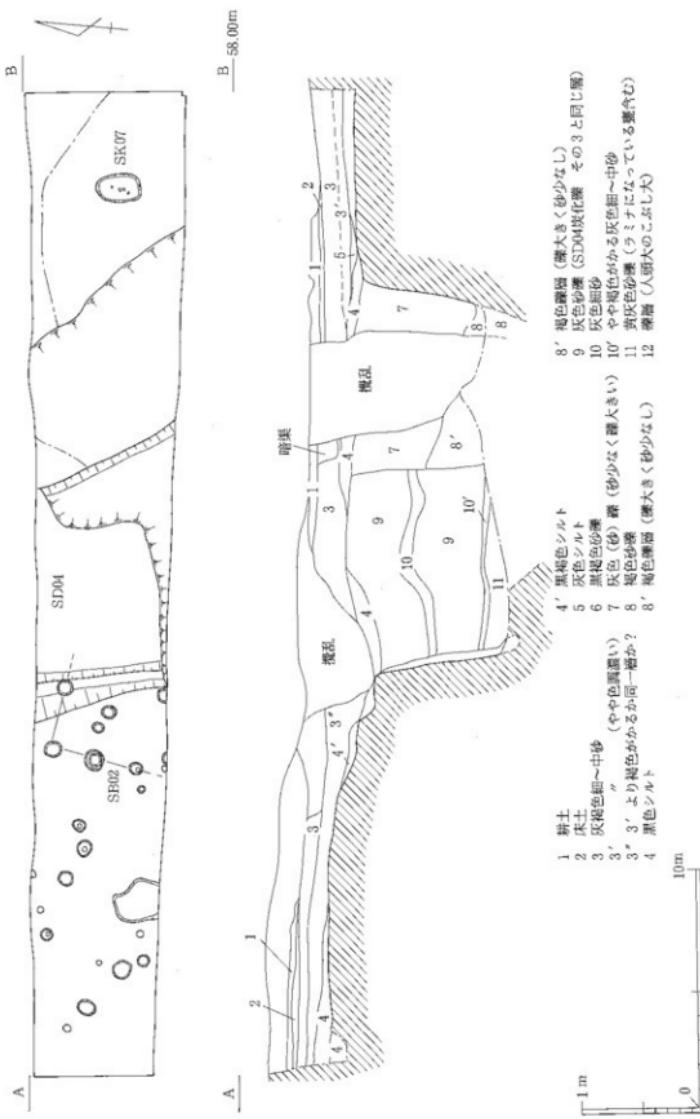


図21-6 トレーン実測図

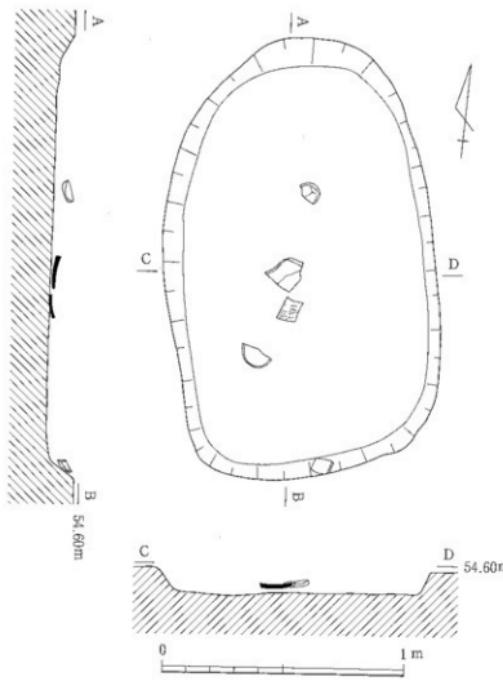


図22 6トレンチ SK07実測図

#### 6トレンチ

トレンチの位置は3トレンチの北側で接した部分に設定している。工事の都合から別の時期に調査したもので、平面的には3~5トレンチと接している。北側に1・2トレンチが位置している。建物基礎部分の幅に合わせており、トレンチ幅は5mである。長さは当初55mを予定していたが、西側は擾乱坑や1トレンチ同様に削平されていることから短縮し、長さは40mとなった。東側は機械設備関係を伴う工事であることから掘削計画も広がっている。そのため東端では幅7mとなるようにトレンチを設定した。

3トレンチなどの調査成果同様に2面の遺構面を検出している。やはり3トレンチ西側同様に延長部分は大きく擾乱を受けており、大溝の底までも手が加えられていた。コンクリートの大型片が投入されており、最近の造成工事によるものであろうと思われた。改変が深くまで及んでいたことから、トレンチ中央部では深度の深い遺構しか残っていないかった。SD04が一部損壊を受けているものの、平面的には確認することができた。

上層の遺構は幾つかのピットと1基の土坑(SK07)を調査している。土坑は長楕円形を呈しており、深さは13cmと浅い遺構である。北側が円形に近く、南側が方形に近い形状をしている。長径は180cm、

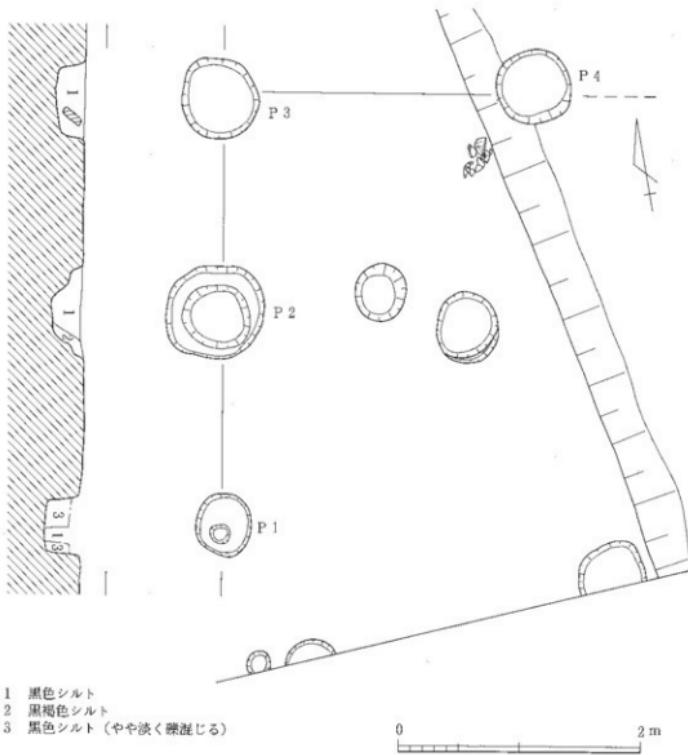


図23 6トレンチ SB 0 2 実測図

短径は115cmを測る。遺物は瓦器・須恵器・土師器が出土している。瓦器は碗で中央やや南西側で出土しており、土師器は皿で大小がある。中央北側と南端の肩部から出土している。須恵器は甕の破片である。形状や遺物の出土状態から墓の可能性の高い遺構である。木棺の痕跡は確認されなかったことから、土塙墓と考えられる。出土遺物から時期は鎌倉時代である13世紀頃と思われる。

下層の遺構は奈良時代と考えられる遺構である。切り合いがあることから、さらに2時期に分かれることが明らかである。古い時期の遺構はピットと土坑が数基検出されている。ただ、柱通りが認められ、掘立柱建物として把握できたものは1棟だけである。SB 0 2で南北に2間、東西に1間しか確認していない。両方向ともに規模は不明である。1間の距離は南北は1.4m、東西は2.1mと数値の大きく異なる柱間をしている。主軸はN4°Eとやや東に振っている。この掘立柱建物を切って大溝(SD 0 4)が築かれている。前回の調査と同様で、幅10mを越える大型の溝である。肩部は東側が大きく現代に削平されているが、かろうじて基礎部分のみ残存していた。肩は直線ではなく緩やかな弧状になっている。肩部の断面形態も水の影響からか下部がえぐられた状況である。出土遺物は3~5トレンチに比べると

少量であった。

#### 7 トレンチ

調査区北端に設定した  $2 \times 40m$  のトレンチである。掘削部分には対応していないが、大溝（SD 0.4）の伸びる方向と規模を把握するために設定したものである。

調査の結果、すでに削平されており、遺構は確認できなかった。地山である疊層が耕作土の下で確認され、包含層もまったく検出されなかった。北側の淵池と 5 m 以上の段差があることから、現在のようなレベルに水田化する時などの早い段階に削平された可能性が高い。



図24 7 トレンチ全景

## V. 出土遺物

山本北垣内遺跡の2年度4回にわたる確認調査の結果、出土した遺物は多量とはいえない。しかし、その中で興味深い資料もそれなりに出土している。出土遺物量は2年度分を合わせてコンテナ（セキスイ TS-28）6箱である。

その中で図化したものは44点である。時期的には弥生時代中期から中世までの時期幅がある。このなかで量的に最も多いのは、奈良時代と中世の2時期の遺物である。この2時期が山本北垣内遺跡の盛期と考えられる。遺構も近世の溝・暗渠を除くと、この2時期に限られることから、遺跡の年代と考えて大過ないものと思われる。

遺構出土の遺物は掘立柱建物の柱穴から出土したもの、大溝（SD 04）から出土したものと、中世墓と考えている土壙（SK 07）出土のものに限られている。他は包含層出土として扱った。ただ、このなかには大溝が埋没したあとで整地面から一括して出土した瓦器碗もある。これは、本来は整地に伴う祭祀の際に一括使用された可能性が十分に想像される遺物群である。同様に須恵器大甕の底部も原位置のある遺物である。ともに明確な遺構を検出できなかったことから、遺構出土遺物としていないが、遺構に準ずる出土位置に意味のある遺物である。

図化した土器の出土した遺構は、4トレンチで検出した掘立柱建物（SB 01）と大溝（SD 04）、6トレンチで検出した土壙（SK 07）・掘立柱建物（SB 02）である。SB 01出土土器は、須恵器・土師器の数点あるが図化したのは須恵器長頸甕の口頭部である。体部の破片も数点あるが接合できなかった。土師器の破片は皿で暗文はみられない。器表には丹が塗布されている。

大溝（SD 04）出土土器は8点図化した。2トレンチを除く各トレンチの大溝から出土したものである。須恵器・土師器の他に遡る時期の遺物も出土している。弥生土器や古墳時代の須恵器・土師器・埴輪も少量混ざっている。奈良時代以前の土器の大半は洪水堆積層から出土している。図化したのは8点で土師器2点と須恵器6点である。土師器は大小の皿が1点ずつで、大型の皿（2）は内面はヘラミガキで調整した丁寧なつくりである。直径16.3cmで端部は内側に肥厚している典型的な奈良時代の皿である。

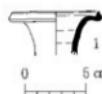


図25 SB01出土物実測図

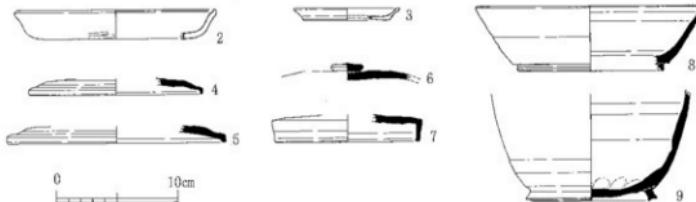
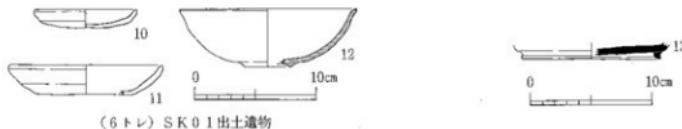


図26 SD 04 出土物実測図



(6トレン) SK 0 1出土遺物

図27 SK 0 7出土遺物実測図

図28 SB 0 2出土遺物実測図

(3)は径8.6cmと小さく底が平たい薄手の皿である。(4)～(6)は坏蓋で、(6)はつまみ部で他は縁部である。(7)は短頸壺の蓋で、径が11.8cmとやや大きい。(8)は坏身で底部を欠いている。径は18.7cmと大きめで径の割りに器高はやや低いタイプである。(9)は壺の底部で肩部より下部の破片である。高台はしっかりしており、底部は平たため丸底に高台を付加している。内面はユビ整形のままである。

土墳墓（SK 0 7）出土土器は瓦器椀と土師器皿・椀と須恵器壺の小片が出土している。完形に近いのは、瓦器椀と土師器皿である。瓦器椀は数個体出土しているが、図化できたのは1点だけである。高台の退化したもので和泉型の瓦器である。磨滅が著しい。土師器の皿は径の大きさに違いがあるが、ともに粗雑な作りである。ユビ成形したのち、口縁部のみヨコナデで仕上げるものである。土師器皿は土壙の北側の幅がやや狭い方から、瓦器は南側の幅の広い方から出土している。

6トレンチの掘立柱建物（SB 0 2）の出土遺物もSB 0 1同様小片が僅かに出土しているだけである。図化したのは須恵器壺の高台部だけである。丁寧な仕上げである。出土遺物から2棟の時期を考えることは困難なように思われ、大きく時期が異なることはないものと思われる。

他の遺物は包含層出土である。(4)は弥生土器の底部で、形状や外観にヘラミガキがなされていることから、壺と考えられる。底部には木葉痕が見られる。後期の所産と考えられる。弥生時代の遺物は土器以外に石器が1点と土製品が1点出土している。(43)は始刃石斧で、よく使用された製品である。刃先も欠損しており、使いこなされた製品であることがわかる。重さも500g弱と一般的な重量である。土製品は(42)の紡錘車で土器片を利用した製品でやや歪な形をしている。平面形が隅円方形に近いもので平坦でなく緩やかな弧状の断面になっている。重さは10gと軽いものである。両側から穿孔している径0.8cmの円孔を中心にしている。

(50)は円筒埴輪の破片である。他にも10数片の埴輪が出土しているが、すべて円筒埴輪である。縱方向のハケメが見られ、タガがM字型をしていることから、初期須恵器平行期から後期初頭頃かと思われる。須恵器の破片も数点認められるが、図化可能な土器はなかった。

(17)～(23)と(28)(29)は奈良時代の遺物である。(17)～(20)は須恵器で、それ以外は土師器である。(17)は蓋であるが、器高がやや高いことから通常の坏蓋ではないのではと思っている。(18)(19)は坏身で、口縁縁部まで残っていない。ともにやや厚めである。高台も退化ぎみである。(20)は壺の下半部でしっかりした高台を持ち、胴部下半から上半にかけての肩部に明瞭な稜縞を持ち直線的に頭部につづいていく典型的なタイプの長頸壺である。(21)～(23)は土師器皿で、ヘラで放射状の暗文を描く奈良時代の特徴を有した土器である。(21)(22)が外開き(外半)するのに対して(23)は直立ぎみである。すべて表面は平滑に仕上げている。(28)(29)は土師器壺で、時期決定しにくいものであるが、一応同時期の壺としておく。ともにハケ整形で、口縁部のみヨコナデを施している。(28)はくの字になるが、(29)は頭部を持たない鍋になるかもしれない。

それ以外は中世の遺物である。(24)～(27)は土師器の小皿で、似たタイプである。ユビ成形ののち口

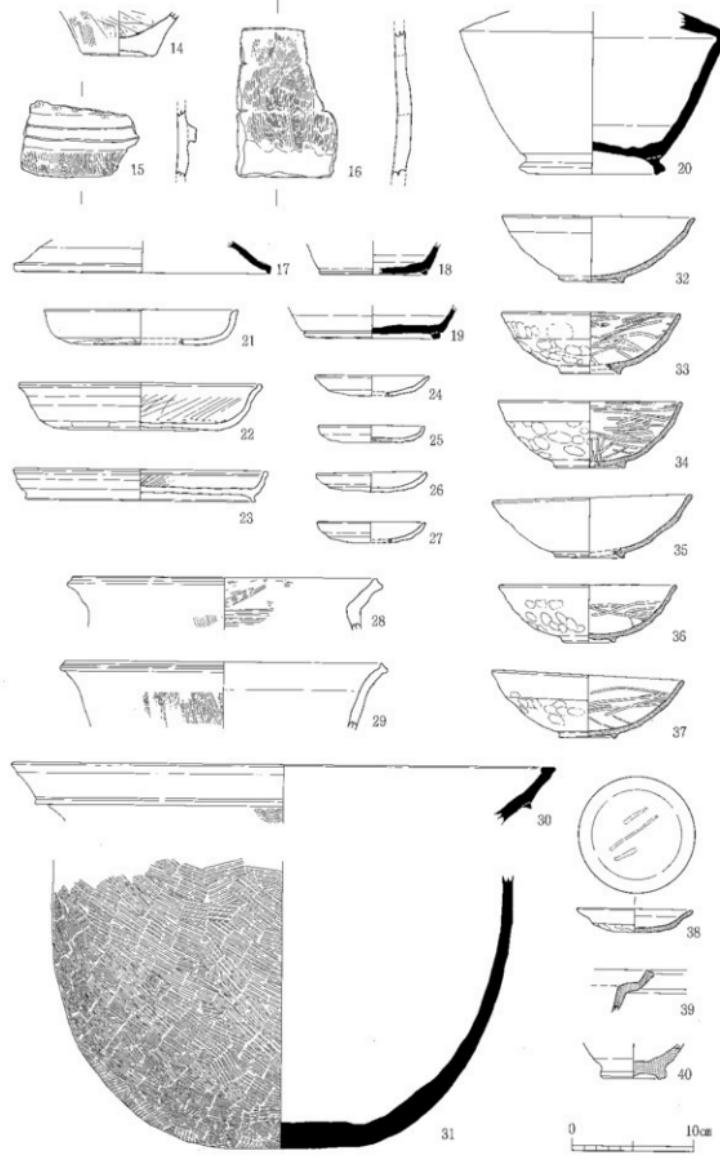


図29 包含層 出土遺物実測図(1)

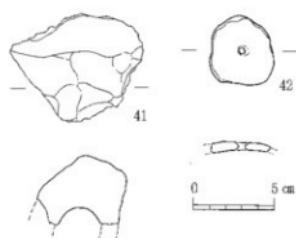


図30 包含層出土遺物実測図(2)

縁部のみヨコナデで仕上げている。体部に後線を持つものと緩やかで稜線を持たないものがある。

(30)(31)は須恵器で、(30)は大型の壺の口縁部である。外面に断面三角形の突帯を付けており、その下に波状文を施している。(31)も大型の壺の底部である。外面は細かいタキで形成している。重心の低い丸底ではあるが接地面の広い底部である。

(32)～(38)は瓦器である。(38)は皿で見込み部に平行の3条の暗文がみられる。他は椀で、(32)以外は重なった状況で出土している。すべて高台が退化した小型のものである。外面はユビ整形で体部に緩やかな後線がみられる。内面には暗文が施されている。(39)は瓦質土器である。鏡の口縁部の小片である。直立する口縁部である。(40)は青磁碗の底部である。

(41)は輪の羽口である。非常に脆弱になっている。小鍛治炉などに接続する部分で、鉢津の一部が付着している。(44)は鉄器である。刃状の1辺を持つが明確に刃とは断言できない。板状になっているが、器種は不明である。

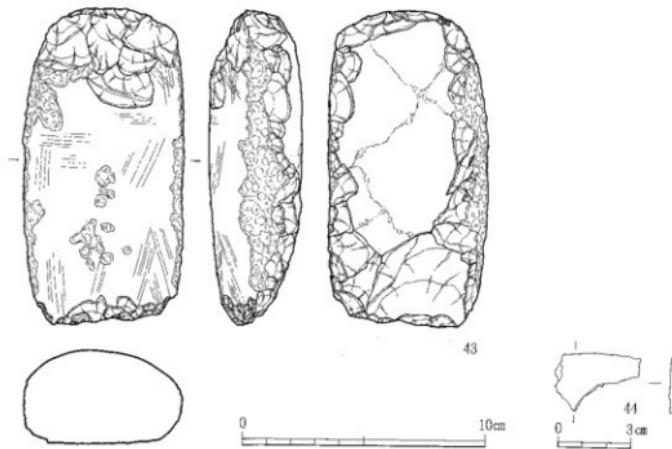


図31 包含層出土遺物実測図(3)

表1 山本北塙内遺跡 遺物観察表

法量の( )は復原径・残存高

## 4 トレンチ SB 01 出土遺物

No	種別 器種	法口径 量底径 cm 器高	形態の特徴	技 法	備 考
1	須恵器 壺	(7.0) (3.5)	口縁端部は上につまみ上げている。口縁部から紙やかにやや上方に上がってから頸部につづく	内外面ともロクロナデ。	内面自然釉付着

## 3~6 トレンチ SD 04 出土遺物

No	種別 器種	法口径 量底径 cm 器高	形態の特徴	技 法	備 考
2	土師器 皿	(16.3) (12.9) 2.4	底部との接線明瞭でない。口縁部へは外方に広がりながら延び、端部は上へ丸くおさめる。	底部外面はヘラケズリ、内面はヘラミガキ、口縁部はヨコナデで仕上げる。	
3	土師器 皿	(8.6) (7.3) 1.0	底部稜線明瞭で、底部の上に体部をのせたような状態で作っている。比較的薄手である。	ユビ成形ののち口縁部はヨコナデで仕上げる。底部外面はその前にユビオサエで整形している	
4	須恵器 坏 盖	(14.1) (1.3)	体部はやや屈曲して直線的にのびている。端部は下方へつまみ出している。	口縁部・内面はロクロナデ。端部のみさらに丁寧な仕上げナデを施す。	
5	須恵器 坏 盖	(17.8) (1.4)	全体的に器肉厚い。端部は大きく全体を下方につまみ出す。	天井部はロクロケズリか。全体ロクロナデ。	焼成不良、生焼けに近い。
6	須恵器 坏 盖	(1.5)	肩部に稜線持たず、緩やかに端部につづいている。	天井部はロクロケズリ。つまみ取り付けの際のナデみられる。ロクロナデののち内面ナデ。	5と同一個体の可能性あり。
7	須恵器 壺 盖	(11.8) (2.2)	口縁部はやや内側に直線的にのびる。天井部も直線的。	外面ヘラケズリ。 口縁部・内面はロクロナデ。 内面一方方向の仕上げナデ。	
8	須恵器 坏 身	(18.7) (11.8) 5.3	体部直線的に外方にのびる。端部丸くおさめる。高台は外方へふんばりきぎみになる。	全体的にロクロナデ。高台周辺は貼り付けの際のナデがみられる。	
9	須恵器 壺	(10.6) (9.1)	体部内湾ぎみにのびる。高台は両方に肥厚している。	底部はナデ調整で高台周辺は貼り付けの際のナデ。内面はナデ顯著。体部はロクロナデ。	

## 6 トレンチ SK 07 出土遺物

No	種別 器種	法口径 量底径 cm 器高	形態の特徴	技 法	備 考
10	土師器 皿	(8.4) 1.55	端部丸くおさめ、全体的に器肉厚い。体部との接線やや弱い。	ユビ成形ののち口縁部のみヨコナデで仕上げる。	
11	土師器 皿	(12.5) (8.2) 2.4	稜線明確でない。体部内湾ぎみにのび、端部は内面に僅かに肥厚するように丸くおさめる。	ナデ成形ののち、口縁部はヨコナデ。	
12	瓦 器 碗	(14.3) (3.8) 4.7	端部は手前で外へ開いている。体部は湾曲している。	高台は貼り付け。	表面磨滅

## 6 レンチ S B 0 2 出土遺物

No.	種別 器種	法口径 量底径 cm器高	形態の特徴	技 法	備 考
13	須恵器 坏 身	(11.2) (1.4)	底部は直線的で高台を付けている。高台端部は外側へ肥厚している。	底部ヘラ切りのちナデで仕上げる。内面はロクロナデのち一方方向の仕上げナデ。	焼き歪みあり。

## 包含層出土遺物

No.	種別 器種	法口径 量底径 cm器高	形態の特徴	技 法	備 考
14	弥 生 壺底部	6.05 (3.65)	底部僅かに上げ底になる。全体的に厚い。	外面ハケ整形のちヘラミガキで仕上げている。内面ナデ成形のまま。	底面木葉痕あり。
15	埴 輪	(6.25)	タガはM形で調整時のヨコナデで変形している。体部は直線的である。	外面はタテ方向のハケ整形。タガ周辺はヨコナデで仕上げる。	表面磨滅。
16	埴 輪	(12.25)	体部直線的だが、磨滅によるためか平滑でない。	粘土の継ぎ目明瞭。タテ方向のハケ整形。	表面磨滅。裾部生きているか。
17	須恵器 蓋	(20.4) (2.65)	体部は直線的のび、端部は下方へつまみ出している。	内外面ともに。ロクロナデ。	
18	須恵器 坏 身	(8.6) (2.65)	磨滅のため縁部丸くなっているが、鋭い稜線は持っていないよう。	底部ヘラ切りのちナデ。体部はロクロナデ。	表面磨滅
19	須恵器 坏 身	(10.9) (2.8)	後縫弱く、体部は直線的に外方へのびる。高台は中央が凹んだ台形である。	底部ヘラ切りのまま。外面はロクロナデ。内面はナデのち不定方向の仕上げナデ	歪みあり。
20	須恵器 壺	(10.6) (13.45)	肩部の縫線明瞭。下半は直線的にのび、外開きの高台になる。高台は内外へ肥厚している。	体部下半はロクロケズリ。内面と外面上半はロクロナデ。	自然釉付着。
21	土師器 皿	(15.8) (13.9) 2.85	後縫弱く、体部内湾ぎみにのびている。端部は外反しつづくおさめている。	底部ヘラケズリ。内面はヘラによるミガキがあるが磨滅している。	
22	土師器 皿	19.7 14.5 3.85	後縫弱く、体部に渋曲しながらつづいている。口縁部は外反ぎみで端部は内側に肥厚する。	底部はヘラ切りのちユビ整形とナデ仕上げ。口縁部はヨコナデ。内面はミガキで暗文にする	
23	土師器 皿	(20.8) (19.0) 2.55	体部直線的に直立に近くのび端部は外外面に肥厚する。高台はふんばりぎみ。	底部はユビ整形・渉整。口縁部はヨコナデ。内面には暗文がみられる。(放射状)	
24	土師器 皿	(9.6) 1.65	後縫持たず、縫やかに端部へと続いている。端部は肥厚し丸くおさめる。	底部はユビ整形。口縁部・内面はヨコナデ。内面は1方向の仕上げナデ。	
25	土師器 皿	(8.6) (4.8) 1.4	後縫弱く、体部内湾ぎみで端部丸くおさめる。内面不定方向の仕上げナデ。	底部未調整。口縁部はヨコナデで仕上げる。	
26	土師器 皿	9.05 1.7	天井部は平坦で口縁部に向かって内湾ぎみにのびる。端部肥厚している。		
27	土師器 皿	(8.9) (1.7)	内湾ぎみに口縁端部につづく浅いタイプの皿。	外面はユビ整形。口縁部はヨコナデで仕上げる。	

Na	種別 器種	法 口径 底径 cm 器高	形 態 の 特 樹	技 法	備 考
28	土師器 壺	(25.0) (4.25)	くの字形で稜線は内面は明瞭。 外側は不明瞭で口縁端部は内外 面に肥厚している。	口縁端部・外側はヨコナデで仕 上げるが、他はハケ整形。	
29	土師器 壺	(25.9) (5.35)	直線的に端部にのびる口縁部。 端部は外側面に肥厚している。	全体にハケ整形ののち、端部周 辺のみヨコナデで仕上げる。	
30	須恵器 壺	(44.2) (4.9)	大型の壺の口縁部で突帯を有す る。突帯下には波状文を施す。 端部は内面に平行につむる。	全体にロクロナデ。	
31	須恵器 壺	15.1 (23.5)	比較的安定したどっしりとした 丸底で、最大腹径位まで残存し ているか。器肉厚い。	外面はタタキ成形のまま。内面 はユビ整形。	
32	瓦 器 椀	15.58 4.9 5.4	高台は小さく外方にふんばりぎ みに広がっている。端部は外反 している。	口縁部はヨコナデで仕上げる。 他はユビ整形のまま。	表面磨滅
33	瓦 器 椀	(14.5) (4.65) 5.0	端部はほとんど肥厚せず丸くおさ める。体部は内湾している。	内面は暗文を施す。口縁端部は ヨコナデで仕上げる。他はユビ 整形。	
34	瓦 器 椀	(14.85) (5.55) 5.5	端部は丸くおさめる。体部は内 湾している。高台はやや外反ぎ みで、小さい。	内面は暗文を施す。口縁端部は ヨコナデで仕上げる。他はユビ 整形。	
35	瓦 器 椀	16.2 5.6 5.0	体部はやや歪で内湾している。 端部は丸く肥厚している。高台 は外方へふんばるように広がる	口縁端部はヨコナデで仕上げる。 他はユビ整形。	表面磨滅
36	瓦 器 椀	(14.4) 4.0 4.7	やや器高の浅いタイプで端部は 丸く肥厚している。高台は小さ めで低い。	口縁端部はヨコナデで仕上げる が、外側はユビ整形のまま。内 面は暗文がみられる。	表面磨滅
37	瓦 器 椀	15.55 4.5 5.1	高台はやや小さく低い。高台端 部も丸みがある。体部は内湾し て端部は丸くおさめる。	口縁端部はヨコナデで仕上げる が、外側はユビ整形のまま。内 面は暗文がみられる。	表面磨滅
38	瓦 器 皿	9.3 7.0 1.9	底部やや大きめで屈曲して体部 に続く。稜線明瞭で外反ぎみで 口縁部になり、端部丸い。	ユビ整形ののち口縁部はヨコナ デで仕上げる。内面には暗文が 施されている。	
39	瓦 質 土 器 鍋	(3.4)	口縁部の破片で、直立する頭部 から大きく屈曲し受け口状の口 縁部になる。端部は角張る。	ユビ整形ののちヨコナデで仕上 げる。	破片小さく 復原不可能。
40	青 磁 碗	(5.0) (2.9)	底部から体部に変わる部分に明 らかな接線あり。高台は角張つ た形状。	高台部分は回転ヘラケズリ。 他はロクロナデ。	高台部分除 いて焼かか る。
41	繖羽口	(7.9) × (3.9)	円形の半分のみ残存。本体に接 続する部分がみられる。		非常に脆弱 になってい る。
42	紡錘車	3.7 × 3.5	土器片を利用した製品。歪で円 形ではない。	両側から穿孔している。	重さ10.0g
43	蛤 刃 石 斧	1 12.86 w 6.58 h 3.80	上面はほぼ平滑で裏面は傾いた 断面が片薙研になる。上面は戴 刃痕がみられる。	体部中央部分は元の面を残して いるが、他は加工されている。	重さ495.5g 刃先欠損。
44	鉄 器 不 明	1 3.5 w 2.4 h 0.27	板状の鉄器で、上面は刃かと思 われる。 他の3面は割れた面。	刃状のものを持ってるが破片 のため不明。	

## V. おわりに

山本北垣内遺跡の調査は、復興住宅建設に伴う事前の発掘調査として行った。復旧・復興を優先するための措置として阪神・淡路大震災に関する埋蔵文化財基本方針ならびに適用要領が策定され、それに準じて発掘調査を実施した。そのため、住宅の基礎部分だけを対象とする調査となつた。そのため、遺跡の細かい広がりなどを把握するための確認調査も、高層住宅の基礎部分に設定した。さらにその調査でも開発計画に則り、兵庫県住宅供給公社と常に細かい打ち合わせを行いつつ、遗漏のないよう、また開発に極力支障をきたさないよう努力し、調査を終了することができた。報告書刊行に際して、現地を訪れてみると、「ラ・ヴュール宝塚」として完成を迎えるようとしていた。復興住宅として、総戸数171戸の家族が入居する予定の高層12階建ての建築である。

発掘調査は文化庁文化財補助金を充て、計4回の調査で終了した。僅かな期間ではあるが、多大な成果を得た遺跡の調査である。すでに坂井秀弥氏が『續日本紀研究』の中で論文を発表されている。古代における伊丹台地の開発に関する論文である。文献と地理学的見地から纏められたものであったが、それを実証する遺跡は確認されていなかった。今回の調査で、それを確認することができたのは大きな成果であろう。『行基年譜』にみえる伊丹台地の開発の根本である池と溝について大きな実証を得たものと思っている。池については大半の先学諸氏が説くように昆陽池を中心とする溜池群で問題ないであろう。

それに伴う溝については、昆陽池からの用水と解釈するか、昆陽池へ供給する導水とするかの論議であった。『行基年譜』に里名が記され、長さ・規模も記されている。どちらの意見（論）をとっても、まるで都馬台国論争をしているようであった。今回、調査を実施した山本北垣内遺跡は山本里に位置する遺跡である。北側に溜池である酒池を要し、西側に伊丹台地へ流れる天神川が存在する。直線距離で3.4km(1200丈)で昆陽池へと繋がっている。論理的に池を作る場合、その確保する水量が必要なことはいうまでもない。地形的に坂井氏が論じているように、自然のままでは昆陽池へは水は流れていかない。何らかの工事が必要なことは明らかであろう。そして今回の調査でSD04という人工的に掘り下げられた大溝を確認するに至った。この溝を遺構として確認し、人工的なものと判断されるなら、直接的に奈良時代後期の事例として行基溝を思い浮かべるのは阪神間で歴史を学ぶ者として当然な帰結と考えられる。今後、どのように流れ、どのような工事をしているかなど、まだまだ検討すべきことはあるが、大枠として山本北垣内遺跡の大溝が『行基年譜』にみえる山本里の上構を考えるものである。

それに先立つ以前に奈良時代の集落が営まれていた事実も重要であろう。今まで遺物は長尾山山本北垣内遺跡丘陵端部に点在し、痕跡も知られていたが、明瞭な集落は未確認であった。加茂遺跡や小戸遺跡の川西市や伊丹台地上の各遺跡や伊丹庵寺・猪名寺等などだけが知られていた。新たに長尾山丘陵山麓部に遺跡が展開する事実は、この地点から導水するための拠点となる本来栄えていた集落が存在し招請したか、地形的にこの地域から導水するための施設と考えられないだろうか。ただ、大溝の同一面と考えることが可能なSB01は大溝を維持するための管理施設という可能性も捨てきれないでいる。SB01と大溝によって切られているSB02が主軸を変えていることも時期的な差があり、性格が異なる2住居群があつてもよいのではないかと推察するものである。山本北垣内遺跡の場合、遺跡の広がりはある程度確定であるが、トレンチ調査に毛の生えた程度の調査しか行っていないことから、面的な調査によって、新たな事実が浮かんでくることも十分に予測される。

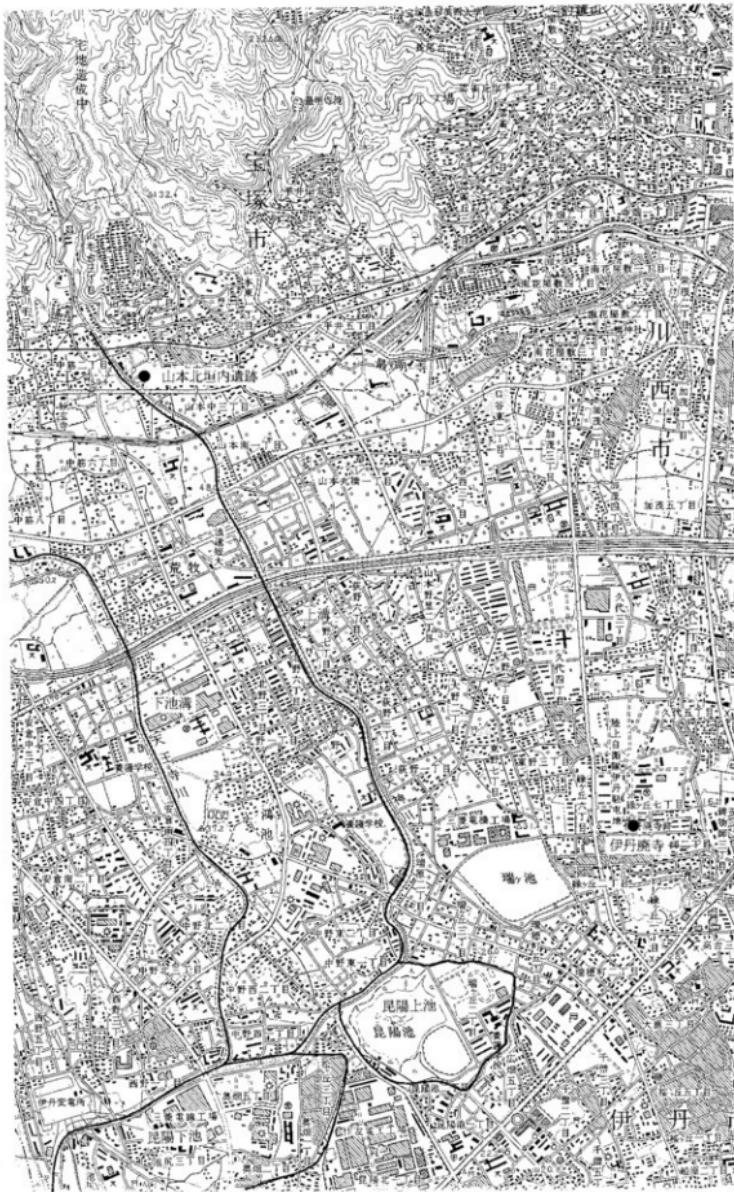


図33 昆陽池と山本北堀内遺跡の関係

時代の遅る遺物も興味深い。弥生土器・石斧の弥生時代中期の遺物と古墳時代中期～後期はじめの埴輪が出土している。弥生時代は点的に周辺で遺物が出土していたが、集落の確認には至っていない。ある程度磨滅を受けていることから、近接して弥生時代の集落が存在するとは思われないが、丘陵末端近くには遺跡が存在するものと期待される。また、丘陵部は前期の万葉山古墳から前期末の長尾山古墳と続き、そこから時期的な古墳の差が認められる。後期の群集墳までを埋める資料として、今回出土した埴輪は評価されるものと思われる。最近、伊丹丘陵南側の猪名野古墳群や伊丹郷町遺跡の下層からもこの時期の古墳が確認されつつある。今まで空白地帯であったが、当然連続と古墳が構築しているものと思われる。やや低い部分や台地上に墳丘が削られた埋没墳が多く確認されるものと想像される。今後とも資料の増加は確実であろうと思われる。



図34 山本北塙内遺跡の上に建設中のラ・ヴェール宝塚

## 報告書抄録

ふりがな	やまもときたかいいちいせき							
書名	山本北垣内遺跡							
副書名	宝塚山本西団地建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告							
シリーズ名	兵庫県文化財調査報告							
シリーズ番号	第170冊							
編著者名	渡辺昇・山本誠							
編集機関	兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所							
所在地	〒652 神戸市兵庫区荒田町2丁目1番5号 TEL 078-531-7011							
発行年月日	1998(平成10)年3月16日							
所取遺跡名	所在地			北緯	東經	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	調査番号					
山本北垣内 遺跡	兵庫県 宝塚市 山本西内2 丁目15 他	28214	950243	34°	135°	1995.10.5. ~ 1995.10.6. ~ 1995.10.18. ~ 1995.10.20.	237m <sup>2</sup>  850m <sup>2</sup>  235m <sup>2</sup>	宝塚山本 西団地建 設事業
		960293		49'	23'	1996.10.7. ~ 1996.11.8.		
			960451	10"		1997.1.20. ~ 1997.1.25.		
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
山本北垣内 遺跡	集落跡	弥生時代 古墳時代	掘立柱建物 溝 火溝 土壙墓	弥生土器 埴輪	奈良時代の集落跡で複数の掘立柱建物が築造されている。 大溝であるSD04は行基が築いたと伝えられる伊丹台地開発の用水溝の可能性の高い遺構で、行基年譜の見開上溝と推定される。			
		奈良時代		須恵器 土師器				
		鎌倉時代		土師器 瓦器 須恵器				
		近世		陶磁器				

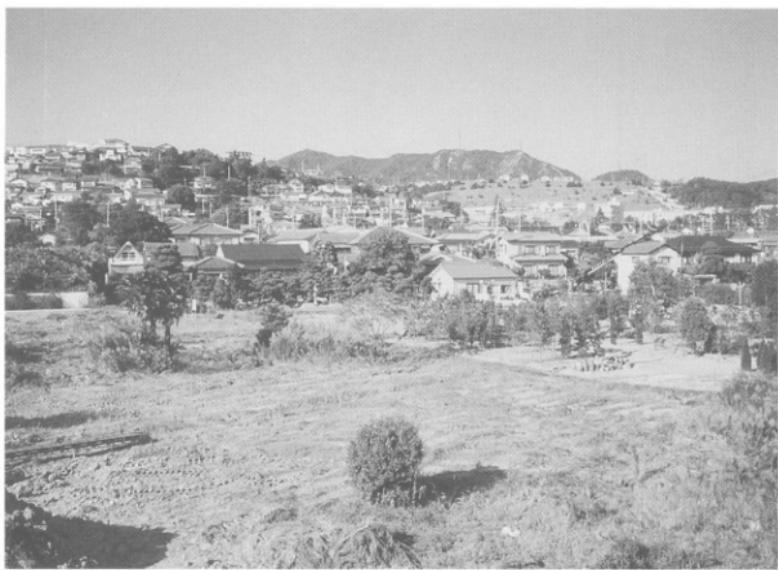
# 図 版



山本北塙内遺跡周辺空中写真



調査地遠景



調査地からみた長尾山丘陵



1 トレンチ上層全景  
(東から)



1 トレンチ  
SD 01・SK 01



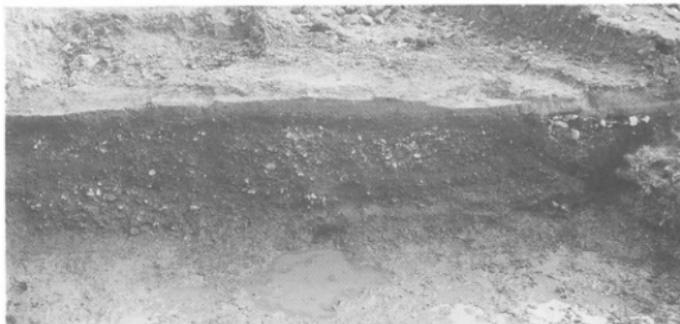
1 トレンチ  
SK 01 (南から)



1 トレンチ SD 04 (北から)



1 トレンチ SD 04 (西から)



1 トレンチ SD 04 堆積状況



2 トレンチ全景（東から）



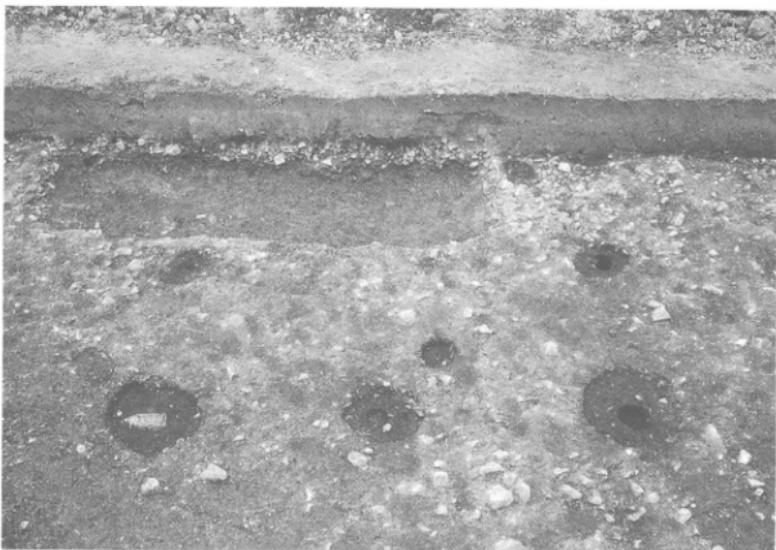
3・4 トレンチ全景（東から）



4 トレンチ全景（西から）



4 トレンチ SB 01周辺（西から）



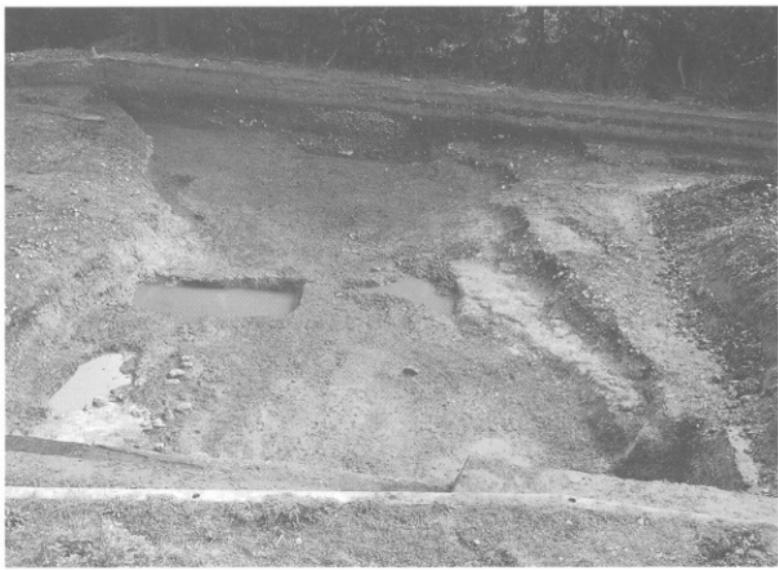
4 トレンチ SB 01 (南から)



4 トレンチ SB 01 柱穴断ち割り状況



3+4 トレンチ東側拡張区とSD 04（北から）



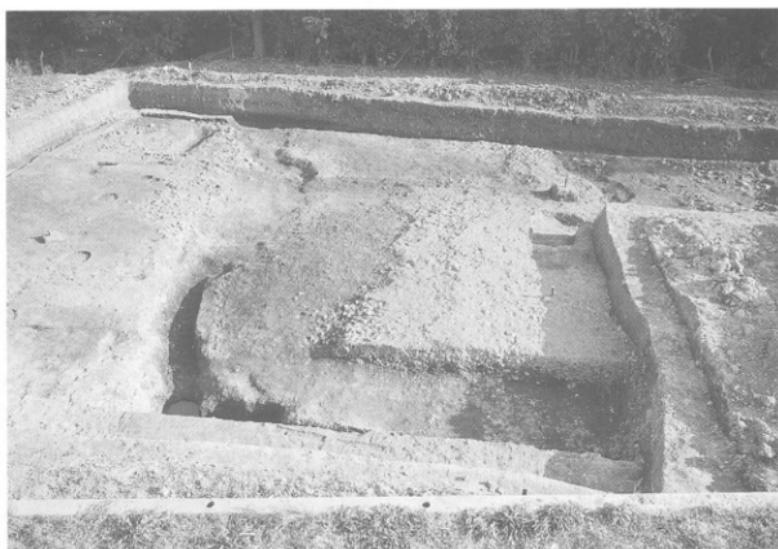
SD 04（北から）



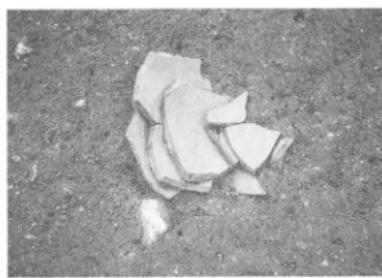
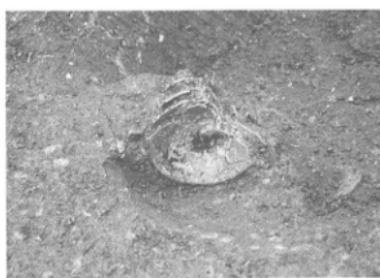
SD 04 北壁



SD 04 南壁



S D 04 砂礫層堆積状況（北から）



S D 04 上面 瓦器出土状態



S D 04 上面 須恵器出土状態



6 トレンチ  
上層全景  
(東から)



6 トレンチ SK 07 全景 (北から)



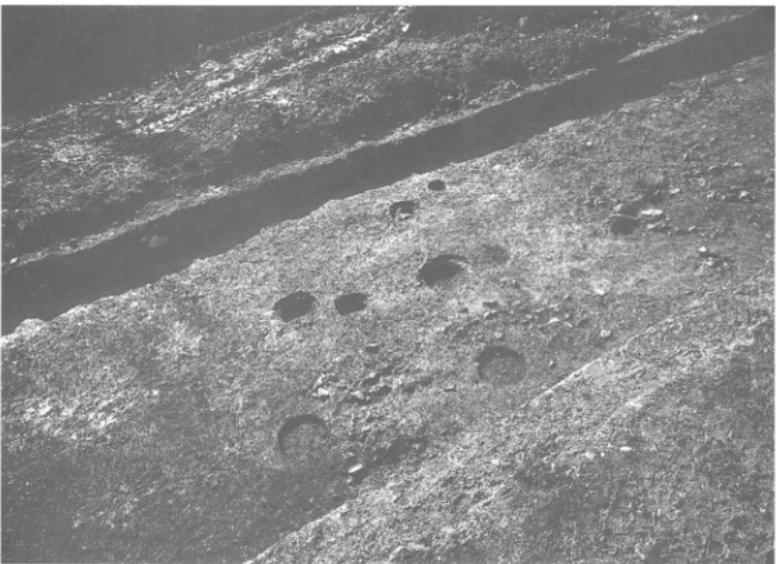
6 トレンチ下層全景（西から）



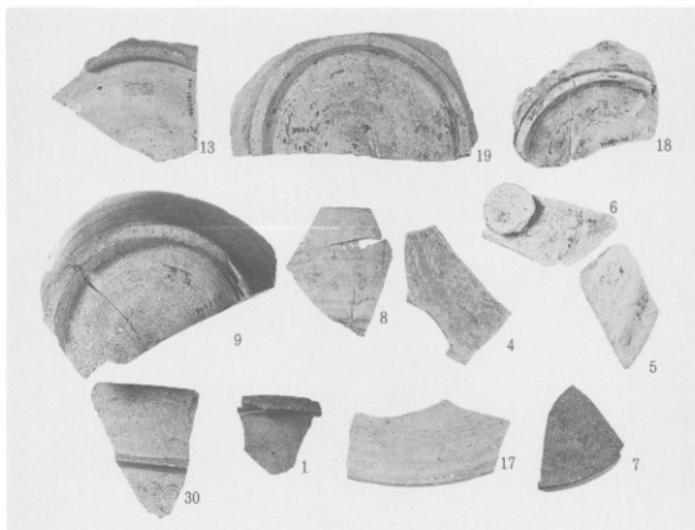
6 トレンチ下層全景（東から）



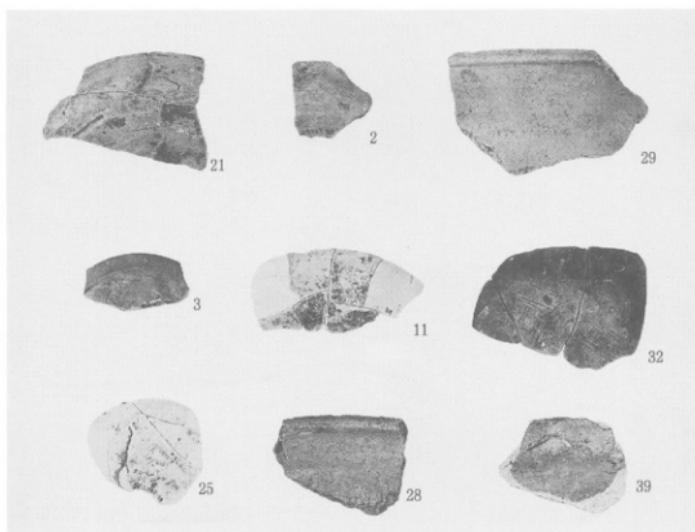
6 トレンチ SD 04 北壁



6 トレンチ SB 02 全景（北から）



出土遺物（須恵器）



出土遺物（土師器・瓦器）



10



12

S K 07 出土遺物



15



16



20



14



22

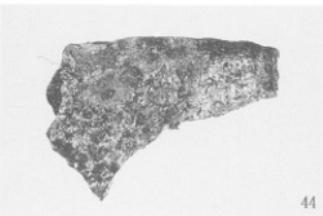
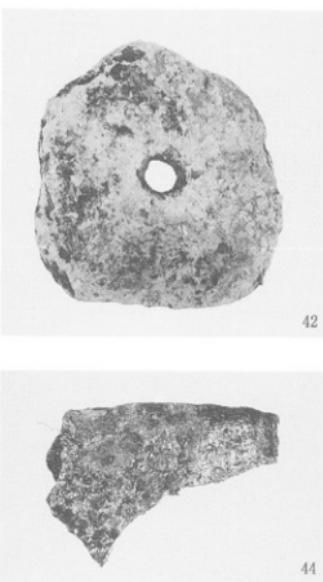


23

包含層出土遺物



包含層出土遺物



包含層出土遺物

兵庫県文化財調査報告 第170冊

## 山本北垣内遺跡

— 宝塚山本西団地建設事業に伴う  
埋蔵文化財確認調査報告 —

1998年3月20日発行

編 集 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所  
〒652-0032 神戸市兵庫区荒田町2丁目1-5

発 行 兵庫県教育委員会  
〒650-0011 神戸市中央区下山手通5丁目10-1

印 刷 株式会社リヨーイン